

卒業生からのメッセージ



弘光 美穂 さん

【プロフィール】
2009年度プロジェクト科目「国際社会でのキャリアデザイン支援プログラム」、2010年度「環境教育教材作成プロジェクト—環境マインドを持った次世代リーダーの育成」「京の台所・錦市場がつなぐ「京の食文化」を子どもたちに伝えよう」受講生。2011年3月に同志社大学法学部を卒業し、現在みずほ銀行で法人営業として東京・埼玉エリアを担当している。

「卒業するために、単位を取りやすい授業を受ける」、「自分で選んだ授業なのに、講義の内容が全く頭に入っていない」、「せっかく高い授業料を払っているのに、それに見合うだけのものを得ているのだろうか」。そんなことを1度でも考えたことがあるあなた、プロジェクト科目はいかがですか？

極端な話をしてしまいましたが、もちろん通常の授業も、たくさんのわくわくするような発見や学びがあります。その魅力も、プロジェクト科目のメンバーとなって様々なことにチャレンジしていくあなたにとっての血となり肉となることでしょう。



少しでも興味を持ってくれたあなたに、私が所属していたサークルのモットーを。迷ったら行け、そこに出会いがある!

私は3・4回生で3つのプロジェクト科目を受講しました。参加者は学年



や学部、価値観も様々であり、授業においては幅広い世代の方々と関わります。初めは緊張しますが、授業での活発な議論や合宿等の課外活動、あるいは飲み会で、腹を割って話すことで仲間と信頼関係を築くことが出来ました。もちろん、1年という期間の中でたくさんの失敗もしました。初めは皆の意見を聞くばかりで、なかなか自分から発言することが出来ませんでした。それでも、授業に慣れていくうちに、1つのゴールに向かって議論する中で自分の考えを提示し、また様々な人々の意見をまとめるという経験が出来たことは私にとって大きな財産となりました。

現在、私は銀行で法人営業として働いています。時には父親よりも年の離れた社長に対して、財務面の提案を行うこともあります。そこで大切なことはプロジェクトで学んだことと同じです。周囲の人々と信頼関係を築くこと、そして自分が出来る限界まで考えに考えたことを相手に分かりやすく伝えることです。

プロジェクト科目は、「同志社」という看板を背負うことで自分たちの活動に責任を持たなければなりません。大学が背中を押してくれるからこそ、京都という地で貴重な経験出来るという醍醐味もあります。もし少しでも興味を持ったなら、迷わず飛び込んでみてください。途中で投げ出さず最後まで頑張ったなら、1年後のあなたはきっと成長しているはずですよ。



PBL

Project-Based Learning

推進支援センター通信

VOL. 6

同志社大学では、講義スタイルとは異なる実践型・参加型の学習機会を重視したPBL(Project-Based Learning)を基本とする授業科目「プロジェクト科目」を2006年度から設置しています。プロジェクト科目では、授業活動を円滑に行うため、受講生に一番近いアドバイザーとして過年度の受講生を中心に、SA(スチューデント・アシスタント)またはTA(ティーチング・アシスタント)を1名、全プロジェクトに配置しています。

これまでは学期末ごとにSA・TA懇談会を実施し、PBL型授業に関わるSA・TAが現場で直面する様々な状況等を意見交換してきましたが、2012年度より教育・学習支援のより一層の推進を図り新たにSA・TA協議会としてスタートしました。

そこで、PBL推進支援センター通信の紙面一新を記念し、今号ではプロジェクト科目のSA・TAにスポットを当て、SA・TA協議会発足の背景や、実際にSA・TAとして活躍している学生をご紹介します。

SA・TA協議会の発足に向けて

プロジェクト科目検討部会長 PBL推進支援センター長
文学部教授 山田和人

今年度から、従来のSA・TA懇談会を改編して、SA・TA協議会として発足させることにしました。今まで過去8回開催された懇談会では、その役割とポジショニングの問題について意見交換がなされてきました。また、SA・TA同士の横のつながりができるようにならないかという問題提起もなされてきました。そこで、今回は、そうした意見を踏まえて、SA・TAがプロジェクト科目の学修支援のために科目を横断して連携する場を作ろうと企図しました。

SA・TAの役割については、基本は授業補助者という位置づけですが、それはただ授業を補佐するというにとどまりません。そこでは、アルバイト業務とは異なる、教育・学修支援のために行動することが期待されています。将来自分自身が研究職や教職に就くかどうかは別にして、一般企業の職場でプロジェクトを任された時や部下ができた時に、ここでの経験が活かされる、そんな教育的業務といえます。ただし、プロジェクト科目の場合は、20科目を越える科目が設置されており、科目ごとに多様な対応が必要になります。そのために、一律に業務内容を規定することが難しいという面もあります。

そこで、SA・TAがお互いの業務内容について理解し合った上で、それぞれの直面している問題について意見交換できる場を作りたいと思いました。いわ

ばSA・TAの横のつながり、互いに立場を共有する者同士の学びあいの場を作ることで、科目を越えたSA・TA同士が、自らの役割やポジションを見いだしていく創造的な場になることをおおいに期待しています。

SA・TAの業務として、活動報告書(業務日誌)をつけてもらうことでお互いのプロジェクトの内容と業務について理解を深めるとともに、その科目の背景を知ることで、より適切なアドバイスをすることができるように工夫しました。そこで毎週、活動報告書を提出してもらうことにしました。学生や教員とは違うSA・TAの立場から、授業の展開や学生の参加度等を観察し、必要な場合には、的確なアドバイスができるようにするために、毎回の振り返りと今後の展望についてまとめ、SA・TAがぶれることなく、客観的に自分自身も含めてプロジェクトを俯瞰できるようになってもらいたい。わずらわしいようにみえるかもしれませんが、この活動記録を通して、ぶれない自分に近づいてもらいたいと思っています。

ともにプロジェクト科目を、より充実したアクティブな学びの機会を提供できる創造的なコミュニティへと育てていきたいと思っています。これから始まるプロジェクト期間の皆さんの活躍におおいに期待しています。

山田センター長のつぶやき

同志社大学PBL推進支援センターの山田和人センター長によるコーナーです。



ロンドンオリンピックで日本は38個のメダルを獲得した。なかでも、競泳は個人種目でありながら、チーム一丸となってメダルを勝ち取った。メドレーリレーはその象徴でもある。アトランタ五輪の惨敗に学び、「個人からチームへ」、選手同士、選手とコーチ、コーチとコーチが互いに連携して学び合い、高め合う体制を整えていった結果として、日本競泳が復活を遂げた。日本選手はメンタル面が弱いなどと非難されることもしばしばだった。しかし、個人としてのメンタルの弱さは、チームの力によって見事に克服された。自分一人ではない、かけがえのないチームの一員だという誇りと自信があったに違いない。

プロジェクトは、まさにメンバーが仲間からチームの一員へと自己変革を遂げた時、個人の力ではなしえない社会へのメッセージを発することが出来る。「チームが個を支え、個がチームを高めていく」そんなお手本を日本競泳チームが、ほくたちに示してくれた。

プロジェクト科目とは?

2006年度から始まった「プロジェクト科目」は、教員が一方的に知識を伝授する講義スタイルとは異なり、受講生自身が構想、計画をし、ディスカッションを重ね、行動する実践型スタイルの授業です。全学共通教養教育科目であり、学部・学年の垣根を越えてチームとして共に活動し、プロジェクトを推進していきます。

【問合せ先】
同志社大学PBL推進支援センター
〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 教務課内
Tel: 075-251-4630 Fax: 075-251-3064
E-mail: ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp
【ホームページ】
<http://www.doshisha.ac.jp/academics/institute/ppsc/>
<http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/pbl/>

PBL教育フォーラム2012開催のご案内

PBL教育フォーラム2012「チームの学びを引き出すPBL〜チームが個人を伸ばすのか、個人がチームを伸ばすのか?〜」を開催します。大変好評であった昨年度に引き続き、今回もPBLに取り組む大学の学生による活動報告を行います。また、参加校の学生代表によるパネルディスカッションではチームの学びに焦点を当てます。是非、ご参加ください。

日時:2012年11月3日(土)13:00~16:30
会場:同志社大学 今出川校地 新町キャンパス 臨光館301番教室
申込:要(先着100名受付)

フォーラム詳細は下記PBL推進支援センターのホームページをご覧ください。
<http://www.doshisha.ac.jp/academics/institute/ppsc/>

2012年度プロジェクト科目においてSA・TAとして業務に当たり、受講生の活動をサポートしてくれている学生の中から3名をご紹介します。



「子供の成長に良い玩具の考察と企画」
TA(ティーチング・アシスタント)

生命医科学研究科
医工学・医情報学専攻
西澤 克彦 さん

「環境づくり」それがTAやSAの役割であると考えます。PBLという未経験の講義スタイルに戸惑う学生が自ら考え行動できるチームを作り出せれば、TA業務の殆どを終えたと言えます。

PBLは学生だけで行うサークル活動とは異なり、知識を学ぶ必要があります。私のプロジェクトでは開講初期に玩具業界や、商品企画についての講義に殆どの時間を費やし、これがその後の活動の根幹となります。しかし、多くの学生がPBLにグループワーク等を期待して受講しています。そのギャップが学生を退屈に感じさせ、モチベーションが低下し、その後に影を落とします。そこで、講義後に「おもちゃ屋に行こう」など学生同士の交流を深め、学生の思うPBLを初

期から実践できるように働きかけました。これはプロジェクトへの「積極的な介入」と言え、学生によるチームビルディングが行われた後はこれを止め、学生に任せるのがTAでしょう。つまり、チームビルディングには関与するが、そのチームに加わらないことです。

学生は自らの考えに対して弱気であり、玩具の企画や、授業の運営について等を教員に相談することを躊躇します。学生の面を持つTAであれば気軽に話せる学生が多く、このことで学生の背中を押し、積極的に行動できるチームに磨き上げます。これは、積極的な介入に対し「消極的な介入」であり、チームのメンテナンスとも言えるでしょう。

最後に目指すのが、メンテナンスフリーのチームであり、「不介入」を意味します。これを目指し、今後の業務に取り組みたいと思います。



「『音楽は心の薬』-高齢者に音楽環境を整える・ラジオを活用して」
SA(スチューデント・アシスタント)

社会学部 教育文化学科 4年次生
西川 久美子 さん

「いつも何かすてきなことがあなたを待つよ」。これは前期に受講生が演奏した曲の一節です。あと半年でプロジェクトがどう成長していくのかを楽しみにしながら、この報告書を書いています。

私がSAを担当するプロジェクトは、高齢福祉施設の音楽環境を整えることを目的としています。現在、高齢福祉施設は、人手不足のため日常生活以上のケアを行うことが難しい状況にあります。そこで、私たちは、①高齢福祉施設で質の高い音楽イベントを開催し、②ラジオで中継することでより多くの高齢者に元気をお届けすることを活動の目標としています。

その中で、私がSAとして注意していることは、常に一歩ひいたところに立ち、プロジェクト全体を見ることです。熱くなりやすい私にとって、常に冷静でいることは難しいのですが、最も難しく楽しいことは、メンバーやチームの成長に合わせて立ち位置を変えることです。もちろん、SAとしての基本的な立ち位置は変わりません。しかし、プロジェクトメンバーの一番身近な伴走者であり、また批判者であるためには、常に立ち位置を模索することが大切だと考えています。

中間報告会を終えた今、私のプロジェクトは、最終目標を見つめ直す時期にきています。「なぜ音楽イベントを行うのか」「なぜラジオなのか」。シラバス通りに活動してきたメンバーに、さまざまな「なぜ」が生まれつつあります。問いに対する答えをメンバー全員で見つけていくプロセスを大切に、SAの立場からどのような支援ができるのかを考えていきたいです。



「京の台所・錦市場を中心に『京の食文化』を留学生に発信しよう!」
SA(スチューデント・アシスタント)

法学部 政治学科 4年次生
高橋 陽介 さん

私は「京の台所・錦市場を中心に『京の食文化』を留学生に発信しよう!」というプロジェクト科目のSAを務めています。このプロジェクトでは、京の食文化を伝える紙面と映像を用いた教材制作をゴールとしています。その教材は留学生と共に制作し、同志社大学の留学生が受講する日本文化の授業で使って頂ける高い完成度を目指しています。

そして、私がこのプロジェクトにSAとして挑んだ理由は、2年間のプロジェクト科目経験を通じ、チームビルディング等多くのことを学んだので、その学びを活かしてプロジェクト活動の推進に貢献したいと考えたからです。また、私がSAを務める中で注意していることは、プロジェク

ト活動を常に俯瞰し、チームの軌道を正すことです。経験上、プロジェクトには陥りやすい罠がいくつかあることがわかっています。例えば、自己満足や危機感の欠如等が挙げられます。そうした罠に陥る原因は、「チームに客観的視点が欠如すること」が最も多いと私は考えています。そこで、私は常に活動を俯瞰することでチームの活動推進に貢献しようと考えています。

しかし、半年間現場に立ちましたが、なかなか上手くいきませんでした。例えば、議論を効果的に進める策を思いついても、出来ればメンバーが主体的にこの策を思い付いて欲しいから発言を自粛するという歯がゆい場面がいくつかありました。そこで、この問題を解決するために、来期が始めるまでにメンバーや先生と相談を通じて私が果たすべき言動について模索しようと考えています。



- ◆2012年4月6日(金) 2012年度プロジェクト科目第1回SA・TA協議会
- ◆2012年7月23日(月) 2012年度プロジェクト科目第2回SA・TA協議会

特集ページでもご紹介しましたが、2012年度よりSA・TA協議会がスタートしました。第1回は春学期講義開始前に開催し、学内資料に基づいたSA・TA業務のガイドラインやプロジェクト科目に特化した諸手続きについての説明に続き、ワークショップを行いました。CNS(Community Networking Service)上での専用コミュニティの開設や活動報告書のアップといった新たな試みも始まり、SA・TAとしての意識の共有や円滑な業務が期待されます。春学期末に行われた第2回では、授業毎に積み重ねてきた活動報告書の効果もあってか、自己満足的な活動への危惧や、チームがまとまってきたからこそ反対意見が出ない、といったプロジェクトの現状に対する鋭い指摘や冷静な分析が相次ぎました。互いの意見を積極的に取り入れようとする姿勢が目立ち、秋学期へと続く活動で、SA・TAが益々重要な役割を担っていくように感じられました。



- ◆2012年5月11日(金)・15日(火) 2012年度プロジェクト科目学生担当者説明会

リーダー、サブリーダー、会計、CNS、学生成果報告書の各担当者を対象とした説明会を開催しました。プロジェクト活動を進めるにあたり、2012年度プロジェクト科目年間スケジュールの確認や、広報に関する注意、学生成果報告書作成要領に加え、会計手続きについて説明がありました。プロジェクト科目は受講生が主体的・自律的に学んでいくスタイルの正課科目であり、各プロジェクトには活動をサポートするための授業運営費が割当てられています。そのため、「大学のお金を使うこと」についての理解が必要となり、手続き方法、申請書類等について、真剣に聞き入っていました。また、説明会後半には、「今日の説明会で学んだこと」のテーマでワークショップに取り組みました。突然始まった初対面同士でのディスカッションでしたが、どのグループも終始和やかな雰囲気の中、意見を出し合っていました。



- ◆2012年7月2日(月) 2012年度春学期プロジェクト・リテラシー講習会

ポスターセッション形式で行う春学期成果報告会に向け、「伝える技術について～ポスターセッション～」と題した講習会を京田辺、今出川両校地において開催しました。今年度もパワープレイズ株式会社濱村道治氏を講師に迎え、講義とワークショップ形式で講習会を進めました。ワークショップでは、5-6人のグループに分かれ「同志社大学から発信!これが未来型大学だ!」を課題に20分間でポスターを作成した後、実際にそれらを用いてポスターセッションを20分間行いました。聞くだけに終わらない参加型の講習会において、受講生達は伝えることの難しさや次々と集まる複数の聴衆への対応の難しさを学んだと同時に、ポスターセッションの面白さも知り、成果報告会に向けて何をすべきか、課題を発見したようでした。



- ◆2012年7月9日(月) 2012年度プロジェクト科目春学期学生懇談会
- ◆2012年8月4日(土) 2012年度プロジェクト科目春学期科目担当者・代表者懇談会

毎学期恒例となった学生懇談会ですが、今回は昼休みの1時間を使って開催しました。京田辺、今出川の両校地からプロジェクト科目受講生代表が1名ずつ集まり、それぞれの活動報告の後、活動が進む中で直面する問題について意見交換が行われました。6名で活動するプロジェクトから15名を越えるプロジェクトまでメンバー数は様々ですが、モチベーションの差やスケジュール調整、リーダーの役割等、共通する課題もあり、活発なやりとりが行われました。また、科目担当者・代表者懇談会では、春学期のそれぞれの活動を振り返りつつ成績評価についても触れられ、秋学期の円滑な活動・運営に向け貴重な意見交換の時間となりました。



- ◆2012年7月29日(日) 2012年度プロジェクト科目春学期成果報告会

昨年同様、京田辺キャンパスのオープンキャンパス開催日に春学期成果報告会が開催されました。春学期科目、春学期・秋学期連結科目を合わせて20のプロジェクト科目がポスターセッション形式で自分達の成果を報告しました。会場には受講生だけでなく、オープンキャンパスに参加した高校生やご父母の姿も多く見られました。また、教務主任連絡会議、全学共通教養教育センター、PBL推進支援センター委員会およびプロジェクト科目検討部会の委員、そして先だって開催したプロジェクト・リテラシー講習会の講師からなる審査員も各ブースを回り、説明する受講生に対し、様々な視点で質問や指摘を投げかけていました。受講生にとっては、春学期の取組姿勢や内容、そして最終目標へ向けたこれからの活動などを来場者にいかに伝えることができるか、培ってきた力を発揮する場となったと同時に、自身のプロジェクトへの理解度も試される場となりました。厳しい講評も受けた中、ただ発表するだけにとどまらない成果報告の場において、新たな学びがあったのではないのでしょうか。また、当日は各プロジェクト及び審査員による投票も行い、最優秀賞、優秀賞が選ばれた他、春学期のCNS利用内容に基づいて受講生間の相互評価により決定したCNS賞(特別賞)が発表されました。各賞を受賞された皆さん、おめでとうございます。



- 最優秀賞:梅田スカイビル(空中庭園・飲食店街他)魅力アップ提案
＜春・秋連結科目、中間報告＞
- 優秀賞:大学発!スポーツプロモーション ～健康で豊かな社会を目指して～
＜春・秋連結科目、中間報告＞
- CNS賞(特別賞):子供の成長に良い玩具の考察と企画
＜春・秋連結科目、中間報告＞